死と白血病に対する小児の意識と「死に関する教育」に対する教師の意識（分担研究：Death Education に関する研究）

宮 本 信 也

要約：小学生から高校生を対象として、死と悪性疾患（白血病・癌）に関する意識調査を行った。調査は、独自に作成した調査用紙を用い、集団記入式で行った。子どもたちは、人間と動物に対して異なる死の意識を有しており、動物に対してより即物的な死のイメージを持っていた。人の死は、外から暴力的に襲ってくるものとして受けとめられていた。白血病の病名は、小学５年生ではその半数しか知っていなかったが、知っている場合には、癌に近い難治のイメージを漠然と持っていた。

見出し語：死、白血病、意識、小児、死の教育、教師

致死的疾患や末期状態にある小児は、説明されていなくても、自分の状態の深刻さをかなり感じているといわれることが多い。そうした子ども達は、死を話題にすることが周囲を困らせることを知っており、そのために、黙って死への不安に耐えているともいわれることがある。こうした患児達に、病状について適切な説明を行うことは、患児達の心理的安定のためにも重要なことと思われる。そして、適切な説明のためには、死や致死的疾患に対する一般の小児の意識を知っておくことが役に立つものと思われる。

一方、最近、AIDSや成人病の予防のために、そうした疾患の好発年齢以前からの学校における健康教育・疾病教育の必要性が指摘されるようになってきている。同様の視点から、「死に関する教育」の可能性を検討することも、末期状態の小児への対応を考える上で参考になるものと思われる

〔目的〕

本研究の目的は、日本の一般小児における死や白血病に対する意識を年齢別に検討することである。さらに、「死に関する教育」に対する学校教師の意識を検討することである。

〔対象と方法〕

栃木県内の小学５年生(144)、６年生(96)、中学１年生(104)、２年生(106)、３年生(103)高校２年生(95)の計６４８人である。どの学年も男女の比率に有意差はなかった。また、同じ学校の教師７９人を成人コントロール群とした。

調査は、独自に作成した調査用紙を用いて、担任教師の指示のもとでの集団アンケート方式で行った。記入は、生徒による自己記入方式とした。

〔結果と考察〕

１．死に対する一般小児の意識

人が死ぬ理由としてまず思い浮かぶもの１つだけをあげてもらった結果が表１である。小学生から高校生まで比較的同じ傾向がみられ、成人コントロールである教師群と比べ、「病気」をあげる割合が少なく、「殺人・戦争・神の意思」などの日常的現実からはかけ離れたものをあげる割合が

筑波大学心身障害学系

高かった。この数字からは、小児は、成人よりも死をより攻撃・破壊的なものとしてイメージしていることがうかがわれると思われた。学年別では、特に一定の傾向は認められなかった。

表2は、人の死後のイメージを尋ねたものである。小学6年から高校生までは同じような結果で、「霊」・「灰」・「腐敗」の3種類のイメージで全体のほぼ3/4 を占めていた。小学5年生では、「何かの形」という回答が他学年に比べて圧倒的に多くみられた。今回の小学5年生がバイアスが何かかかっている対象なのかもしれない。しかし、一方では、昨年度の同様の調査においても小学5・6年生でこの回答が多かった(14%、19%)ことを考え合わせると、小学5年生前後の発達段階を境にして小児の死のイメージが変化することを示しているのかもしれない。より低学年の小児を対象とした調査を行うことで、その結論が得られると思われる。

人が死後に生まれ変わることがあると思うかどうかを尋ねた結果が表3である。約50〜55%の小児が、生まれ変わりをあると思うと回答していた。学年による差は認められなかった。

さらに、生まれ変わる場合、人間かそれ以外の動物かという設問に対して、人間という回答が約30%前後、人間以外という回答が40〜50%であった。この回答の背景には、仏教的な輪廻思想の影響があるのかもしれないが、今回は各回答の理由を尋ねていないので残念ながら推測するしかできない。この設問に対する教師群の回答は、人間への生まれ変わりが42%で、残りは全てわからないというもので、人間以外のものへ、という回答は認められなか

表1　人が死ぬ理由に関する意識　(%)

	小学校		中学校			高校	成人
	5年	6年	1年	2年	3年	2年	教師
病気	31.9	24.0	29.8	29.2	26.2	25.3	51.9
寿命	26.4	37.5	36.5	24.5	23.3	22.1	22.8
事故	20.1	20.8	24.0	21.7	35.0	33.7	20.3
殺人・戦争	15.2	9.4	3.9	9.5	7.7	9.5	1.3
神の意思	4.2	3.1	1.0	8.5	1.0	2.2	0.0
自殺	0.7	3.1	1.0	3.8	2.9	3.2	0.0
その他	0.7	0.0	1.0	0.0	1.0	1.1	1.3
わからない	0.7	2.1	2.9	2.8	2.9	3.2	2.5

表2　人の死後のイメージ　(%)

	小学校		中学校			高校	成人
	5年	6年	1年	2年	3年	2年	教師
霊	31.3	32.3	30.8	23.6	25.2	33.7	17.7
何かの形	36.8	10.4	9.6	11.3	4.9	10.5	1.3
灰	9.7	24.0	18.3	23.6	22.3	25.3	21.5
腐敗	9.0	24.0	24.0	18.9	25.2	18.9	19.0
その他	5.6	1.0	2.9	5.7	3.9	4.2	10.1
わからない	7.6	8.3	14.4	17.0	18.4	7.4	30.4

表3　人の生まれ変わりに関する意識　(%)

	小学校		中学校			高校	成人
	5年	6年	1年	2年	3年	2年	教師
あると思う	51.4	57.3	52.9	49.1	49.5	48.4	15.2
ないと思う	27.8	24.0	25.0	25.5	23.3	27.4	41.8
わからない	20.8	18.8	22.1	25.5	27.2	24.2	43.0

った。

一方、人の霊の存在に関して尋ねたものが表4である。ここでも、小児の方で霊の存在をあると思うと答えたものが多くみられた。

もちろん、こうした数字から直ちに、これだけの割合の小児が本当に生まれ変わりや霊を信じきっている、ということはできない。むしろ、知識や経験の不足もあり、小児では成人よりも積極的に否定する根拠をもたない者が多いことが、こうした数字の背景とも思われる。

表4　人の霊の存在に関する意識　（%）

	小学校		中学校			高校	成人教師
	5年	6年	1年	2年	3年	2年	
あると思う	69.4	56.3	51.9	42.5	55.3	55.8	30.4
ないと思う	13.2	17.7	19.2	17.9	16.5	14.7	21.5
わからない	17.4	26.0	28.8	39.6	28.2	29.5	29.5

表5　白血病という病名を知っているか？　（%）

	小学校		中学校			高校
	5年	6年	1年	2年	3年	2年
は　い	83.8	64.6	79.8	89.6	92.2	94.7
いいえ	16.7	35.4	20.2	10.4	7.8	5.3

2．白血病に対する一般小児の意識

表5は、白血病という病名の認知度を示したものである。教師には尋ねていない。学年が進むにつれ認知度が増加している。しかし、学年により変動はあるが、中学1年頃までは少なくとも約20%程度の小児は、白血病という病名を知らないことがうかがわれる。なお、病名の情報源としては、テレビをあげたものが53%と最も多く、次いで情報源不明（忘れた）が22%であった。さらに、両親、教師、マンガが、各々5%前後であった。

表6以下の結果は、病名を知っていると答えた小児だけの回答である。難治性に関するイメージでは、年齢による特定の傾向は認められず、小児でも成人でも70%前後が難治・不治の印象を持っていた。癌という病名に関して同様の設問をした結果では（表7）、難治・不治の回答が、小学生で癌に対しての方が多く認められた。癌に関する情報の方が白血病にかんするものよりも日常場面では多い

表6　白血病はどれくらい治ると思うか？　（%）

	小学校		中学校			高校	成人教師
	5年	6年	1年	2年	3年	2年	
みんな治る	1.7	1.6	2.4	1.1	2.1	4.4	0.0
治る人が多い	18.3	17.7	16.9	20.0	22.1	24.4	20.3
治る人は少ない	67.5	59.7	57.8	47.4	62.1	53.3	62.0
みんな治らない	5.8	8.1	12.0	22.1	8.4	10.0	6.3
わからない	6.7	12.9	10.8	9.5	5.3	7.8	11.4

表7　癌はどれくらい治ると思うか　（%）

	小学校		中学校			高校	成人教師
	5年	6年	1年	2年	3年	2年	
みんな治る	2.1	8.3	9.6	9.4	10.7	21.1	12.7
治る人が多い	12.6	6.3	12.5	12.3	16.5	20.0	21.5
治る人は少ない	72.0	74.0	52.9	57.5	56.3	45.3	58.2
みんな治らない	11.9	4.2	13.5	19.8	10.7	10.5	2.5
わからない	1.4	7.3	11.5	0.9	5.8	3.2	5.1

ため、白血病の病名になじみの薄い小学生では癌の方の難治のイメージの方が強くなっているためと思われた。白血病の難治性に関する知識の情報源としては、不明が50～55%と最も多く、日常生活で何気なく見聞きする情報から難治のイメージが作られていっていることがうかがわれた。テレビをあげたものは14%であった。

表8・9は、白血病に関する誤った認識度を調査した結果である。感染性については、平均、小学生で20%前後、中学生で10%前後、高校生で5%前後のものが、誤った知識を持っているという結果であった。小学生では、病気の発症様式について感染症以外の様式を知っているものが少ないことがこの結果の背景と思われた。一方、遺伝性に関しては学年差がなく、30～40%の小児が遺伝性があると思うと回答していた。さらに、教師でも14%が同様の回答であった。感染性に関しては、病気の発症様式の多様さが理解できるような年齢になると、常識的な知識と日常経験で正しい判断を下せるようになると思われるが、日常的知識では推測しにくい遺伝性のような項目では、正しい判断をする根拠がなく、印象で回答してしまっているためと思われた。

小児の白血病の予後に関する設問では、教師よりも生徒の方が知っている者の割合が多いという結果になった（表10）。その情報源としては、全体の約1/3 はテレビをあげ、1/4 はいつのまにか、と答えていた。

表8　白血病は他の人にうつると思うか？　(%)

	小学校		中学校			高校
	5年	6年	1年	2年	3年	2年
は　い	29.2	16.1	9.6	12.6	10.5	6.7
いいえ	50.8	74.2	61.4	69.5	68.4	72.2
わからない	20.0	9.7	28.9	17.9	21.1	21.1

表9　白血病は親から子どもへ遺伝すると思うか？（%）

	小学校		中学校			高校	成人
	5年	6年	1年	2年	3年	2年	教師
は　い	34.2	37.1	31.3	40.0	32.6	41.1	13.9
いいえ	41.7	37.1	34.9	29.5	31.6	26.7	59.5
わからない	24.2	25.8	33.7	30.5	35.8	32.2	32.2

(%)

表10　子どもの白血病は治りやすいことを知っているか？

	小学校		中学校			高校	成人
	5年	6年	1年	2年	3年	2年	教師
は　い	17.5	19.4	26.5	12.6	20.0	13.3	10.1
いいえ	82.5	80.6	73.5	87.4	80.0	86.7	89.9

表11　死に関して学校で生徒に話した経験(%)

	小学教師	中学教師	高校教師
あ　り	83.2	77.4	58.3
な　し	16.7	22.6	41.7

3．「死に関する教育」についての教師の意識

学校内で死に関する事柄を生徒に話したことのある教師は、小学校で最も多く、以下、中学、高校と進むにつれその割合は低下していた（表11）。話した対象としては、小学校では95%がクラスの生徒全員であり、中学・高校では65%がクラスの生徒全員で、あとは全校生徒・部活の生徒・一部の生徒などが各々10%前後であった。死に関する話題は、担任として自分のクラスの生徒に話して

いる状況がうかがわれた。

死について話した背景をみると（表12）、全体では何らかの形で子どもの死に関する事柄が生徒の周辺に生じている場合に、それと関連して話されていることが多いようであった。話した内容では、死そのものではなく、むしろ死と関連させて生きることの大切さを話しているものがほとんどであった。

表１２　生徒に死について話した背景　（%）

	小学教師	中学教師	高校教師
授業の中で触れる部分があった	0.0	25.0	35.7
学校で飼育していた動物の死	5.0	0.0	0.0
生徒間で死後の世界の話題が流行	0.0	4.2	0.0
学校の生徒の死	20.0	4.2	42.9
子どもの自殺に関する報道	20.0	25.0	0.0
子どもの死に関する報道	0.0	16.7	7.1
なんとなく・その他	55.0	25.0	14.3

「死の教育」のイメージを持っているかどうかは、死について話した経験の有無とは関連がなく、比較的多くの教師は「生の大切さ」を教えるという意味での「死の教育」のイメージを持っていた（表13）。

表１３　「死の教育」のイメージが浮かぶか？　（%）

	小学教師	中学教師	高校教師
はっきり浮かぶ	0.0	25.0	35.7
ある程度浮かぶ	5.0	0.0	0.0
多少浮かぶ	0.0	4.2	0.0
浮かばない	20.0	4.2	42.9

そのような「死の教育」のイメージのためか現状の教育体制、あるいは、多少の変更により教育現場で「死の教育」は可能であると感じている教師が多く認められた（70～80%）。「死の教育」の担当者としては、担任教師（60～70%）をあげたものが一番多く、次いで養護教諭（10%前後）であった。

〔まとめ〕

1．小児は、死に対して外部から襲ってくる破壊的なものというイメージを持っているものが比較的多かった。死のイメージが、このように破壊的なものであることは、無になるという成人が感じる死の恐怖とは別の意味で、死は小児に強い不安や恐怖感を抱かせるものであることをうかがわせる。小児と死に関する話題を共有するとき、こうした破壊的イメージを小児が持ちやすいことを意識しておくことは、死に対する小児の不安を理解する上で役に立つことと思われた。

2．一般に８歳前後から、小児は成人と同様の死の意識を持つようになるといわれている。今回の結果は、少なくとも小学６年生から高校２年生までの小児は、比較的類似している死の意識を持っていることを示していると思われた。一方、小学５年生前後に死の意識が変化する可能性も示され今後検討すべきことと思われた。

3．白血病の病名の認知度と難治性のイメージは小児の80%以上に認められ、少なくとも、小学５年生以上では、病状説明に際して白血病という病名を伝える場合充分な配慮が必要と思われた。

4．疾患に関する情報源としてテレビが果たしている役割を認識する必要があると思われ、今後、マスメディアと通じての正しい情報伝達を医療側も考える必要があり、そうすることで、疾患の説明が行いやすくなると思われた。

5．教育現場が抱く「死の教育」のイメージは、「生の大切さの教育」であった。健康な小児に対する「死の教育」では、「死」を強調しない方が受け入れられやすいと思われた。また、教師に対する「死の教育」研修の必要性も感じられた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:小学生から高校生を対象として・死と悪性疾患(白血病・癌)に関する意識調査をおこなった。調査は、独自に作成した調査用紙を用い、集団記入式で行った。子どもたちは、人間と動物に対して異なる死の意識を有しており、動物に対してより即物的な死のイメージを持っていた。人の死は、外から暴力的に襲ってくるものとして受けとめられていた。白血病の病名は、小学5年生ではその半数しか知っていなかったが、知っている場合には、癌に近い難治のイメージを漠然と持っていた。